



慶應義塾大学ビジネス・スクール

女性活躍推進と地域限定社員(B)

5

—中川恵子の「壁」—

「これだ！ T 大学にビジネススクールがあったなんて知らなかった。ここなら会社から自転車で 10 分、家からも 5 分程。夕方から夜間の開講なら、仕事をしながら通える。これよ、これ！！」

10

女性経営塾への参加を断り、次に何をしたらいいのか、漠然と模索していた中川の目に飛び込んできたのが、ビジネススクールの学生募集広告だった。ちょうど年末年始で実家に帰省し、新年に瀬戸内新聞の紙面をパラパラめくっていた時のことである。

年始の休み明け早々、中川は T 大学ビジネススクールの募集要項を入手し、2 月初旬の試験日に向けて慌ただしく準備に取りかかった。

15

2016 年 4 月、中川は自分で見つけた S 市内の T 大学ビジネススクールに入学した。中川が 39 歳になる春のことであった。

20

T 大学ビジネススクールへの進学

1. 仕事と勉学の両立

ビジネススクールは職場から自転車で 10 分程のところのところに位置していた。この近さが、仕事と勉学を両立するのにありがたかった。進学に当たって担当業務を減らしてもらうような措置はなく、週 2、3 日の業務後と土曜日に授業を取った。厚生労働省の教育訓練給付制度を活用し、残る学費は自己負担だった（学費の 6 割が給付金、4 割が自己負担）。

25

このケースは実在する中川恵子（仮名）からの全面的な協力を得、彼女の経験を脚色して作成した。謝意を表す。ケースに登場する人物は全て仮名である。ケース作成者は高木晴夫、吉澤康代、鶴ヶ谷理子である。本ケースは無断複製を禁ずる。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright © 高木晴夫、吉澤康代、鶴ヶ谷理子（2019 年 7 月作成）